

マーケット概況（2020年4月）

4月の債券相場は、新型コロナウイルス感染拡大による世界経済の悪化や日銀買入オペ増額に伴う需給の引き締まりが意識され、買いが先行した。順調な結果となった2日の10年債入札を受けて10年357回債の利回りは-0.015%に低下したが、米国で新型コロナウイルス感染者数のピークアウト期待から株価が急伸したことで売りが優勢となった。その後は、7日に政府による緊急事態宣言が発令されたことで市場参加者が減少し、方向感に欠ける展開となった。16日に政府が国民一人当たり10万円の現金給付を発表すると、国債増発に伴う需給悪化懸念から超長期債が売られ、20日に30年66回債の利回りは11ヵ月ぶりに0.500%に上昇する場面があった。しかし、WTI原油先物が暴落して初めてマイナス価格で取引されたことや、日銀が追加の金融緩和を実施するとの報道から買いが優勢となった。27日に日銀が国債購入額の上限撤廃を含む金融緩和策を決定すると、28日に10年358回債の利回りは-0.055%まで低下した。月末にかけては、海外における経済活動再開や新型コロナウイルス治療薬への期待を背景に日経平均株価が3月9日以来となる2万円台を回復したことから上値が抑えられ、結局、10年358回債の利回りは-0.040%で取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は発行増額による需給軟化への警戒感や、ベシススワップ金利のプラス化による海外投資家需要の後退により軟調に推移した。3日の3M898回債入札は、最高落札利回りが-0.10%台と前回債から横ばいとなった。その後は-0.11%~-0.12%台の入札が続いたが、-0.1%台前半では投資家からの買いが入り、最終的に3M903回債は-0.150%で取引を終えた。一方、6M・1Yは中期債の金利低下や、国庫短期証券買入増額期待に伴い概ね-0.1%台後半で堅調に推移し、6M899回債は-0.180%、1Y901回債は-0.200%で取引を終えた。

<一般債市場>

新発10年地方債は再びスプレッド方式となり、国債カーブ+13.0bpの条件で起債された。シ団方式の10年政保債が発行されなかったことから、10年地方債が初めてベンチマークとなった。5年地方債は国債金利のボラティリティが3月中旬以降高まったことから、前月までの水準を切り上げ2019年3月以来の0.02%クーポンで決定した。新型コロナウイルス拡大の影響から全般的に先行き不透明感が強まる中、新発、既発債ともに絶対値を確保したい向きが観測された。社債発行額は8,400億円と前年同月比8,000億円程度減少した。世界的な景気悪化による業績不安からリスク回避姿勢が強まり、長期年限を中心に発行額の減額や高利率の起債が見受けられた。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#358	0.025(2日)	-0.055(28日)	0.025(2日)	-0.040(30日)
#357	-0.005(1日)	-0.060(28日)	0.020(2日)	-0.050(30日)
#347	-0.155(1日)	-0.170(28日)	-0.095(15日)	-0.165(30日)
#143(5Y)	-0.090(9日)	-0.175(28日)	-0.090(9日)	-0.160(30日)
#172(20Y)	0.335(21日)	0.280(24日)	0.345(21日)	0.300(30日)
#899TDB(6M)	-0.125(9日)	-0.192(13日)	-0.125(9日)	-0.180(14日)
#897-#903TDB(3M)	-0.200(1日)	-0.200(1日)	-0.130(10日)	-0.150(30日)